MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2020. 1. 10　発行元
第 30 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ダシール・ハメットの世界その2

前号に引き続いてハメットの特集。「ハードボイルド」を理解するには、ハメットの人物像を理解することが大切である。今号では、ハメットの伝記をスタートに、ハードボイルドの本質に迫る分析を心がけたい。

ハメットの伝記・2冊

ハメットの代表的な伝記は２冊ある。ひとつはダイアン・ジョンスンによる『ダシール・ハメットの生涯』（日本語版は１９８７年に早川書房から発刊。訳者は小鷹信光。）であり、もうひとつはウィリアム・F・ノーランによる『ダシール・ハメット伝』（日本語版は１９８８年に晶文社から発刊。同じく小鷹信光の訳）である。ともにアメリカで１９８３年に出版されたもの。

２冊を読み比べてみると、ノーランの研究が先にあった部分もあるようで、自分の方が「より正確だ」といった主張が顕著に出ている。

人の受け止め方、考え方に差ができるのは当然のことなので、ハメットをどう分析するかの見方が分かれるのは当たり前だと思う。

社会派とは違うハードボイルド

ハメットは、同時代に活躍したヴァン・ダインなどの犯罪小説を徹底して批判している。現実的ではないと。探偵社での実際の調査をしてみると、世の中の出来事は全く違う話だと感じざるおう得ない。「狂乱の２０年代」と呼ばれる激動のアメリカ社会の中で、多くの人たちは何を考え、どう行動していたのか……。

ハメットは、第２次大戦以降は作品を書いていない。軍に所属していたことも原因のひとつだが、戦後、アメリカを覆った「赤狩り」の流れの中で、社会的・政治的動きを咎められ、投獄されたことなどが影響している。

ハメットにとっては、社会の矛盾や権力者の横暴、政治の腐敗などは許せないものだったのだ。若い頃に、小説の中に叩き込みたかったのは、そういったエネルギーだったのだと思う。

それがハメットの中にある「ハードボイルド」の原点だったような気がしている。

もちろん、犯罪を中心にした社会問題を取り上げればハードボイルドになるか、というとそうでもない。そこが後の「社会派推理小説」とは違うところ。

世の中を見る目としてのプライベート・アイ。冷静に観察をし、雰囲気や感情に流されず、「我が道を行く」という探偵の人物像が物語の上では大切な役割を持っているである。

雑誌『ブラック・マスク』に載っていた他作家の作品が皆そうだと言うわけではないが、何人かの先駆者がいて、その中でハードボイルドが完成されていったのだと思う。

小説として、やはり「文体」は大切

また、ハードボイルドにおいて、文体は重要なポイントである。どうしても、アクションに目を引かれるが、それが本質ではない。ハメットの小説には暴力がたくさん出てくるが、暴力場面を直接描くことは少なく、暴力が行われた後のことを描写して、そこで起こったことを読者に感じ取らせようと工夫している。

探偵、または主人公の一人称の視点。感情を交えず、行動中心の描き方をする淡々とした文。冷静に、派手過ぎず、地道に世の中を調査して描く。そこには、「自分はどう生きるのか？」という問い掛けが常にある。カッコ良さ等と言うのはどうでもよいこと。他人の評価を気にしていないのだから。

「『孤独』は駄目で、『絆』が良い」とされるような使い古された価値観ではなく（今の日本でもそういうことを口にする人も多いが…）、「自分は自分の信じる道を行く」という強固な意志を示すことが重要なのだ。

文体そのものについては、私は実にアメリカ的であり、現在の文学にふさわしい表現だと思っている。“感情”をあからさまに表現するのではなく、事実を描くことで、残りの諸々の部分は読者に委ねてしまうということ。

後に続くハードボイルドは？

残念。もう、書くスペースがない。最後にジョー・ゴアズが１９７５年に書いたミステリ『ハメット』について少しだけ。ピンカートン探偵社時代のハメットが、同僚の死の謎を解決するために、“卑しい街”へと調査に向かう物語である。偉大な作家、ハメットの研究が進み、次の新しいハードボイルドが今後も生まれてくることを期待している。

ジョー・ゴアズ…１９３１年生まれのアメリカのネオ・ハードボイルド作家。数々の職業を経験した後、サンフランシスコで私立探偵を１２年間勤めた。ハメットを尊敬し、ハメットの諸作を研究した結果、本文に記したように『ハメット』を主人公にした小説を書いたことで有名。これが映画化され、話題を呼んだ。自身の私立探偵の経験を生かした「ＤＫＡファイル・短編シリーズ」や、１９６９年発刊の『野獣の血』、１９７２年の『死の蒸発』などがある。日本語訳の大部分は角川文庫、一部が新潮文庫だった。